資料

なかのしま幼稚園における統合保育の実践

芝木　捷子・小田　進一*

（2018年1月9日受稿）

抄録：　約半世紀を経た，なかのしま幼稚園における統合保育について，改めて振り返り，現在特別支援教育の一環として，障がい児の保育に取り組んでいる事の意味と今後の展望を開くため，これまでの枠組みと保育の実践，保育者の現状認識を整理するための資料の収集・分析を行った．

キーワード：統合保育，子どもの成長過程，統合保育実践上の課題

Ⅰ．はじめに

幼児期の成長にかかわって，幼稚園が果たすべき役割は限りなく大きくなっている．なかのしま幼稚園においては，かねてよりこの観点を深化させて，健常児と障がい児とを共に保育をする統合保育が子どもの成長発達にとってより一層の意義と効果を有するものと判断し，実践してきた．

近年，心身に障がいを持つ診断・判定される子どもが増えている．こうした状態に対応して，幼稚園や福祉・教育行政も多くの対策を講じているところである．

ここに，なかのしま幼稚園における統合保育の事例を報告することで，あらためて，「共に育つ」実践の意義と教訓を明らかにし，今後の取り組みや施策に資するものとしたい．

1．なかのしま幼稚園の統合保育の歩み

1-1．取り組みの動機となったエピソード

開園当時から知的障害のある子ども達は入園していた．1960年4月，朝の一斉保育の時，窓越しに一人の幼児を背負った母親が，園児の活動を食い入るように見るようになった．ある時は，背中の子の耳元で朝の歌をうたい，またある時は，リズムに合わせて体を揺り動かし，全身を使って必死に背中の子どもの感覚を呼び起こそうとするかのような母親の努力の姿であった．この子は出生時障がいによる重度の脳性麻痺で，四肢に重い機能障害と言語障害，それに聴覚障がいを有し，移動はおろか，食事，排泄など全てに介護を必要とし，どこの幼稚園や保育園からも入園を拒否されていた．万策尽きた母親がわが子を背負い，窓越しに園内活動に加わっていたのだ．

この子の入園を認めた当時の園長は，母親も含めたプロジェクトを組織し，自らその中心となって，その子の保育に取り組んだ．すべてを介護しながら，少しでも自分でできることはないかと，細かな計画を立てながら子ども達と一緒に介助の手を差し伸べていった．食事の時には，初めは口の中に入る量よりも多く下にこぼしてしまう状態だったが，半年も過ぎたころから，こぼす量が少しずつ減ってきた．この子どもの保育がきっかけとなり，様々な障がいを持った幼児が入園してくるようになった．

1-2．その後の展開

このケースに手ごたえを得た園は，障がい児の受け入れを拒むことなく，様々な対策を講じながら，統合保育の取り組みを進めてゆく．何よりも重要なのは，保育者の力量の伸長と支援者の確保であった．以下に受け入れた障がい児の数と，これに対応する支援体制の整備について記す．

北海道文教大学大学院こども発達学研究科院生
*北海道文教大学大学院こども発達学研究科

1-3. 園児数の推移

年号	障害児数	全園児数	支援体制及び ◎研修等	国の動き
1956	9	32	統合保育開始	「公立養護学校整備特別措置法」公布
1957	6	34		北海道札幌養護学校開校
1959	12	66		精神薄弱・肢体不自由・病弱という対象別の学校を設置
1961	10	119		学校教育法一部改正　第六章　特殊教育大幅改正
1962	12	165		「学校教育法施行令の一部を改正する政令+」公布（盲学校、養護学校の対象となる盲者などの心身の故障の程度を規定
1963	10	205		文部省　特殊教育資料で養護学校種別ごとに示す。精神薄弱養護学校は 36 校。
1964	13	343		盲学校・聾学校それぞれ学習指導要領小学部編を告示
1967	8	346		特殊教育諸学校の幼稚部　危険建物の改築について国庫補助
1969	7	280		全国に肢体不自由養護学校設置
1971	6	241		中央教育審議会「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」　答申
1972	11	265	担任１名　母親ボランティア（自分のクラスの補助	札幌市立大通小学校・中央小学校に情緒障害学級を設置
1973	16	368	担任１名　母親ボランティア（他児のクラスの補助） ◎札私幼大会おいて「障害児について」を発表　1977 まで	
1974	14	395	◎国立特殊教育総合研究所　特殊教育協力者となる（～1977）	
1975	16	305	◎全日本私立幼稚園連盟　全国大会『統合保育』　発表	
1977	35	306	◎全日本私立幼稚園連盟　全国大会『統合保育でのあそび』を発表 ◎北海道私立幼稚園研究大会　公開保育と研究発表・工藤孝次先生助言のもと「普通児と共に保育を受ける障害児」を発表	
1979	32	408	障がい児が複数名のクラスに支援者が入る（12 クラス中 7 クラス）	養護学校の義務制施行　「幼稚園における心身障害幼児指導法等調査研究協力者会議」設置
1980	38	424		文部省「心身障害児の理解のために」刊行

1981	32	439	ＯＴのアドバイスを受ける	
1983	31	500		文部省　幼稚園教員対象に「心身障害児教育の手引」作成
1986	29	506	ＯＴが常勤となる 個別指導を始める	
1993	5	21	◎札私幼集録「あべけんちゃんの連絡帳」発表	
1994	15	443	◎北海道私立幼稚園教育研究大会「ともに育ち合う生活」を発表	
2001	18	426		「特殊教育」から「特別支援教育」へ呼称を変更
2011	50	345	年中のクラス、2 クラスに 1 名の支援者。他の 11 クラスは担任と支援者。	
2012	42	318		
2013	39	347	全クラス、担任と支援者	

記載年は，支援体制，研修等，動向に特記事項がある年に限っている.（詳細は別の機会に譲る.）

1956年から1978年までは，個人立の幼稚園であったが，入園を希望した園児は，入園することができたので，健常児，障がい児区別なく（障がい児は，診断･判定されていなくても）入園した．1973年には，自閉症の子どもが入園し，担任一人では行き届いた保育ができないことから，母親がボランティアとして，自分の子どものクラスに入って支援した．1年間経過して，わが子についていることで，何でも手伝ってしまい，子どもの意思が無視されるなど，かならずしも適切な支援ができないということで，1974年からは，他児のクラスに入ってもらい，どのように援助してほしいかに応えながら，支援してもらった．年数がたつと，母親の願いで入園した時とは違い，入園できて当然と思う親にとっては，どうして私たちだけボランティアをするのかと言う声が聞こえるようになった．1978年学校法人になると同時に，支援者も幼稚園教諭が当たることになり障がい児から診断書・判定所を提出してもらうようになる．9クラスに対して,7名の支援者ということで，支援者のいないクラスには，障がい児の中でも，子どもと一緒に成長していくことのできる障がい児というように，子どもの状況によって支援者がつくクラスが検討された．1988年からは，作業療法士が職員となり，個別指導と統合保育での障がい児をどのように援助していくか教師とともに深めていくようになる．また，アメリカの自閉症施設を見学することで，感覚統合訓練を受けている障がい児の行動がとても安定することを知り，作業療法士が個別指導として感覚統合訓練を行うようになった．2013年からは，各クラスに支援者が入り，指導の充実を図るようになる．国の動き，文科省からの通達などは，ひとり一人の子どもに必要な指導を心がけているなかのしま幼稚園では，もう実行済みということばかりだった．

なお，2013年から2017年については，障がい別に詳しく示す．

	人数	肢体	言語	視覚	聴覚	知的	情緒	病弱 虚弱
2013年	38	0	0	0	1	13	23	1
2014年	32	3	0	0	0	9	20	0
2015年	29	9	0	0	0	1	19	0
2016年	34	8	0	0	0	0	26	0
2017年	32	3	0	0	0	2	27	0

2017年の状況についてその状況をみる．

・5歳児—105名中　障がい児10名（発達障がい6名・肢体不自由2名・知的障がい2名）
・4歳児—124名中　障がい児20名（発達障がい19名・情緒障がい1名）
・3歳児—101名中　障がい児2名（発達障がい1名・肢体不自由1名）
・3歳児の中には，診断・判定はされていないが，経過を見ている，「さっぽ」・デイサービスに行っている子どもが8名いる．1年経過したのち，診断が下されるものと思われる．

1-4. 受け入れの手続き

札幌市の幼稚園では，幼稚園園児の入園は，10月15日願書配布，11月1日入園受付となっている．最近は4月の新学期が始まると，次年度のための見学や幼稚園の説明会などがある．特別支援が必要な子どもの受け付けは，私立幼稚園では幼稚園によって違うが，親子で幼稚園に来てもらい面接をし，行動観察をした上で，どんなクラスで遊ぶことができるかを検討する．

1955年から1979年までは，診断・判定されていなくても，健常児と一緒に手続きをして統合保育をしていた．1976年から学校法人の幼稚園には，障がい児の補助金が出ることとなり，個人立だったなかのしま幼稚園は，1947年学校法人聖徳学園なかのしま幼稚園となった．国・道の特別支援の補助金は，障がいを持った子ども一人に対しての補助金で，その後2010年から出るようになった札幌市からの補助金は，支援する教師に対しての補助金となった．

1-5. 保育支援者の配置

上記にも触れたが，1955年から1972までは，1クラスに1人の担任で，クラスには知的障がいと疑いのある子ども達も一緒に遊んでいた．1972年当時の園長のことが新聞掲載された．どの様な子どもも一緒に遊ぶ統合保育を行っているという記事だったので，自閉症を持つ子どもの親が多数相談に来園，入園を決めた．自閉症の子どもが入園することで，いろいろなことに興味を持っていることに対応できず，クラスに一人の支援者が必要となり，1973年から，お母さんにボランティアをお願いすることになった．初めは対応に慣れている子どもの親にクラスに入ってもらった．1年経過して，わが子についてもらうと，両方に甘えが出て，手をかけすぎ，声を掛けすぎて，子ども自身で遊びを展開していくことができなくなり，1974年から，他人の障がい児のクラスに入って援助してもらうことにした．

次第に，親から「私達も子どもを先生に任せて，家庭で子どもが帰ってくるのを待てるようになりたい」という希望が出てきた．1979年学校法人になり，補助金で支援者を入れた．一クラスに複数の障がい児が入り，障がい児が入っているクラスだけ支援者をいれた．2011年2012年は，2クラスに一人の支援員となり，2013年からは全クラスに支援員が付いた．

1981年札幌医科大学に作業療法学科ができ，その準備室に入られた教授は，実践との関わりを重視する方で，当園の子ども達の訓練をし，統合保育をしていくうえでのアドバイスをしてくれた．1986年，医大の第1回卒業生が，作業療法士として職員に加わり，個別の訓練と，統合保育での先生へのアドバイスをしている．

1-6. クラス編成の形態

一般的に統合保育というのは，狭義の統合保育では，健常児のクラスに数名の障がい児が入るというもの．逆に障がい児のクラスに，交流などの目的で，健常児が数名保育に参加するということもある．特別保育として，障がい児のみの特別クラス・個別指導などは，盲学校・聾学校などの幼稚部で行われている．交流保育として，障がい児通園施設に幼稚園や保育園の子ども達が遊びに行き一時的に交流するというもの．分離保育というのがあり，園全体の中に1クラスだけ障がい児だけのクラスがあるというもので，札幌には1園だけ分離保育を行っている園がある．

なかのしま幼稚園では，1クラスに多くの健常児の中に2名から5名の障がい児が入り，2名の指導者がいるという形で統合保育を行い，作業療法士による個別の訓練も併せて行っている．

1-7. スタッフの力量の向上の取り組み

幼稚園の教諭になるために学んできた人は，障がい名については多少学んでも，その子らにどのような生活のしにくさがあるのかは学ばないまま就職する．障がい児を初めて見たのは実習の時という教諭や障がい児のいるところでボランティアをしたなどの経験しかない教諭には，日々の子どもの姿から学んでいくことがとても大事なことである．その上で，新学期が始まると，その年にいる障がい別の特徴・行動特性などに合わせて，それまで数回親子で登園している時に観察したこと，家庭調査書に書かれていることについて話しあう．毎日の話し合いは，報告などが多いが，障がい児の，変化のあったこと，注意すべき事柄，関わり方，教員で共有しておきたいことなどが話し合われる．行事などの参加の方法・担当者なども検討する．1か月に一度，教師たちが学びたいと思うことを出し合い，勉強会をする．園の作業療法士，幼児教育センターの先生，札幌医科大学の作業療法学科の教授などに講義してもらう．

1974年から3年間，園長が国立特殊教育所の特別教育協力者となる．1977年3月　園長，教諭1名がアメリカ情緒障がい児教育セミナーに参加．その後先生の中から3名位ずつ，毎年アメリカに研修に行き，自閉症，情緒障がいについて理解を深めている．アメリカ，ロスアンゼルスにて感覚統合訓練を見学し，障がい児にとって個別の訓練の必要性を感じる．1981年，ロスアンゼルスの施設の先生を招いて，講習会を行う．通訳としてアメリカで感覚統合を一緒に学んでいた作業療法士S教授が来園してくれる．その作業療法士が，後々障がい児の訓練をしてくれ，アドバイスをしてくれることになる．

以下，主な研究発表である．

1975年　日本私立幼稚園連盟全国大会において「統合保育について」研究発表．
1977年7月　日本私立幼稚園連盟全国大会において「統合保育での遊びについて」発表．
1977年10月　北海道私立幼稚園研究大会において「統合保育の公開保育と研究発表．
1973年から1977年　札幌市私立幼稚園連合会研究大会において「障がい児について」発表．
1980年　札幌市私立幼稚園連合会研究大会において「障がい児」の分科会で発表・司会．

その他，幼稚園の教師たちも，分科会などで発表を重ねてきた．

2. 統合保育による成長事例として汲み取られる意義

2-1. A子の3年間の成長過程から見えてくること

未診断だが，知的障がい・発達障がいの疑いのあるAちゃんについての3歳から5歳（2015年4月から2018年3月）までの成長過程と保育の計画である．ここでは，この子の成長過程を共に生活する子ども同士の関わりに着目して記録したものを整理した．

＜年少＞

入園当初は表情も硬く，言葉も出ていなかったため，自分のやりたいことが出来ないと，大声で泣く姿があった．また周りの状況を見ても，理解する事が難しく，また興味を持つことがなかったため，自分では行動出来ず，教師の側にいることが多く見られた．

生活面においては，衣服の着脱，排泄，後片づけ等多くの援助を必要とし，困っている事があっても自分で意思表示することはなかった．また，身体面において歩行ではバランスが悪く，少しの段差で躓き，転ぶ事があったため，階段では常に援助をしていた．

目標として，園生活に慣れ一緒に活動を行う中で，友達と一緒にあそぶ楽しさを味わえるよう働きかけていったところ，年少後半から友達に興味を持ち始め，顔を近付ける姿や，友達が手を繋い

できても受け入る姿が見られていた．体を動かす事や歌が好きで，一緒に真似をする様子も見られたが，相手の気持ちを理解出来ない，一方的なかかわりも多かった．

教師が声をかけないと，弁当箱のふたをいつまでも開けずに黙っている．自分から片付けやジャンパーを着ようとしない．というように，最後まで全てに援助が必要であった．

＜年中＞

進級当初はクラス替えにより教師や友達，環境が変わったため，また表情が硬くなり，食事が進まなくなる等と緊張している様子が見られた．少しずつ慣れてくると笑顔が見られ，教師が話しかけるとこちらに意識を向けて言葉を発する姿が見られるようになったが，オウム返しで答える事が多く，コミュニケーションは取りにくかった．

日常生活で決まった活動は少しずつ自分で行えるようになったが，活動には個別の援助が必要であった．

生活面においては，排泄はトイレで行えるようになったが，声をかけて促さなければ自分からは出来ずにいた．また，ジャンパーのチャックや制服のボタン掛け等出来る事が増えてはいたが，全てにおいて声かけが必要であった．その時の気分や，他に気をとられると行動が止まってしまうことがあったので，常に見守りを要していた．

目標として様々な活動へも興味を持ち，友達とかかわる場面を増やしていったところ，近づいてきてくれる友達と仲良く過ごす姿が見られる様になり，年中後期からは，少しずつ単語での会話が出来るようになったことで,友達に挨拶をしたり,友達の側に行く姿が見られたりするようになった．オウム返しのやり取りが多い中，教師の名前を呼んで意思表示をし，簡単な質問に答えるようなった．

＜年長＞

進級当初から不安になることはなく，園生活を理解していることもあり，慣れた活動では個別の声かけではなく教師が全体へする声かけで行動している．周りの状況や友達の行動を見て，行動に移す姿も見られるようになってきた．排泄では，自分のタイミングで行けるようになる等，習慣的なことは自立してきたが，注意が抜けてしまうこともあるので，必要に応じて援助している．

言葉の面では簡単な会話は単語で返答が出来るが，言葉の表現によっては，ニュアンスが伝わらないことがある．少しずつであるが，ひらがなに興味を持ち，読めるようになってきている．

園での様々な活動に対しては，個別の援助がまだ必要である．

目標として，友達や教師との交流を通し，言葉でのコミュニケーションが少しずつ増えるよう，教師が必要に応じて輪の中に入れたり，見守ったりしている．友達とかかわるようなあそびでは，教師が促すと言葉での交流が増え，楽しく活動に参加する姿が増えてきている．また，自分に気を配ってくれる友達の側に行き，その友達の名前を呼ぶ姿も見られてきている．

身体のバランスも少しずつ安定してきており，階段では交互に足を運ぶことが出来るようになる．

11月に行われた保育発表会では，クラスの友達と発表会の活動をすることを喜び，オペレッタでは，自分の役だけではなく，友達の役にも興味を持ち覚え，自ら表現し，楽しんでいた．

2-2.　これらの，経験から汲み取られる統合保育の意義

①健常児に与える影響

・障がいに対する違和感を持たなくなる．

・思いやりの気持ちが育ち，障がい児への援助の仕方が自然に身につく．

・障がい児に対する正しい理解が進み，豊かな人間理解につながる．

②障がいを持っている子どもの側に与える影響

・大勢の健常児とのかかわりで，様々なふれあいのある生活となる．

・色々な人間関係で変化が生まれ，障がい児が

力を発揮するチャンスが増える.

・健常児の開かれた社会性に刺激され，障がい幼児が社会性を広げることができる.

・健常児との人間関係で，問題場面に出合い，自分で解決しようとする逞しさが育つ.

③統合保育が抱えている課題

・障がい児への知識・指導力を持った保育者が少なく，担任となった保育者の負担となる.

・障がい児に必要な施設・設備の改善ができていない.

・障がいの程度がより重い幼児の受け入れも増加.

・保護者が子どもの障がいの事実を受容せず，幼稚園や保育所に入園するケースが増加.

2-3. 統合保育の今日的な意義

これまで掲げて取り組んできた統合保育の意義について，今日的な意味や園全体としての認識等検討が必要である. これまでを振り返りまとめた.

1）統合保育の始まり

障がいをもつ人への理解も低く，福祉制度も整わない時代から長きにわたって統合保育を行ってきた．その苦労を苦労とも思わず，障がいを特別視せずに，個人を尊重した丁寧な統合保育であることを，時代が変わっても意識し続けることが大切だ.

2）大切にしていること

肢体不自由の子，発達障害や自閉症を持つ子，難病の子など様々な子どもが入園してくる．その子に加配の教師がついて生活するのではなく，子ども同士の生活の中で障がいを持つ子も，周りの子ども達も共に成長し合える環境を作っていくことが大切である.

その子の持っている障がいや，その子自身が持つ特性を，教師間では入園前から共通理解するところから始める．毎日の園生活の中では，障がい児クラスを設けることなく生活する中で，その子のこと全てを含めて子ども同士認め合い，対等な仲間としての絆を深めていける様な日々をすごしていきたいと願い, 保育を進めている．幼児期に，自分と友達の違いを感じながら，相手を認めていく経験を積み重ねていける様な生活を送れるかどうかは，教師の願いが込められた日々の保育に組み込まれた仕掛けが重要である．また，30年前から作業療法士が常勤していることは，障がい児個人の発達も支えていく上で重要なポイントと言える.

3）日常の園生活の意味

入園したばかりの子ども達は，自分と教師，わずかな周りの友達との並行あそびから始まる．毎日の生活の中で，友達と遊び始め，行事などを通しながら周りの人への関心も広がってくる．その中で，教師の声がけや援助，介助を自然と見聞きしていく.

支援の必要な子も多様であるが，障がいを持つ子どもの症状や病気についての説明などはしない．しかし，子ども達は理屈ではなく，生活の中で理解していく．幼稚園生活の毎日は，どの子どもにとっても刺激的な毎日で，喜びと発見，問題発生と問題解決の繰り返しである．その生活の中で，成長の仕方が多様な子，身体の不自由がある子，成長が緩やかな子の事も含めて考えていく姿が子ども同士の姿からみられる様になる.

運動会では，ゆっくりでも，車いすでもゴールに向かう友達を，先にゴールした友達が声を大にして応援し，ゴールまで頑張った子はみんなが1等賞だと言う．発表会では，お稽古の時には全く参加しなかった子が, 少しの時間でも参加すると，クラス全体で喜び，賞賛する姿がみられる.

障がい児は，自分らしさを周りから受け入れられ，安心した生活の中で，その子のペースで生きる力を身につけていく様にみられる．また，障がいを持つ子どもは支援を受けるばかりの立場ではない．彼らとの出会いが他児の心持ちの成長には大きく影響していると感じる.

4）まとめ

障がいを持つ子どもは，卒園後の進学先が様々である．通常級で健常児の中で過ごす子も，小学

校からは同年代の健常児と関わる機会がほとんどなくなってしまう子もいる．しかし，なかのしま幼稚園で積み重ねた生きる力を基に，自分を嫌いになる事なく生き生きと学校生活を送ってほしいと願う．

健常児は，卒園後の生活の中でも幼児期に出会った友達の事を，ふと思い出すような出来事があると思う．なかのしま幼稚園で統合保育の日常を過ごした子どもたちは，人を見下したり，面白がったりするようなことなく，人を尊重する心を持ち続けることが出来ると信じたい．

教師の立場からすると，統合保育は大変難しく，忍耐力も必要だが，幼児期の生活で，障がい児だけのクラスにしたり，1対1対応をすることが，ノーマライゼーションとは言いにくい．障がいを持つ子どもにクラスの時間を使うことや，必要な援助をすることは不平等なことではなく，共に生きる仲間としてごく当たり前のことである．

なかのしま幼稚園が統合保育を始めた時代とは違い，乳幼児検診の診方も療育機関も，児童デイサービスなどの福祉制度も整い，障がい児を取り巻く環境は良くなっている．なかのしま幼稚園では，時代に合わせ，日々のあそびも見直しをしながらではあるが，健常児，障がい児，そして私たち教師を日々育んでくれる「統合保育」という環境が不可欠なものであると考え，教職員みんなで保育の方向性を共有していくことを大切にしている．

Ⅱ．終わりに

統合保育に取組んだ当初は，その言葉の意味を園全体で共通理解していたとはいえないだろう．しかし，導入の意思は今日に脈々と受け継がれている．

障がい児保育実践園として築かれたものを整理する作業の端緒には着いたものの，資料収集の域をでない．資料解釈と評価を直近の課題としているが，障がい児保育に関わる多様な価値についての実践的な検討こそが目標である．子どもにとって，保護者にとって，望まれる関わりの在り方の実践的方法論を構築するべく取り組んでいきたい．

Integrated Childcare in Nakanoshima Kindergarten

SHIBAKI Katsuko and ODA Shinichi

Abstract: This paper reviews integrated childcare in Nakanoshima Kindergarten over the past half century. Materials were collected and analyzed in order to examine the significance and future prospects for the care of disabled children, and clarify the perceptions of kindergarten teachers with regards to the present situation and current practices.

Keywords: integrated childcare, children of the growth process, integrated childcare practice issues